
忠臣と呼ばれたい

ユウナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忠臣と呼ばれたい

【コード】

N1109Y

【作者名】

ユウナ

【あらすじ】

軽くまとめると、オリ主が魏で色々、暗躍しながら頑張っていく話です。

第一話（前書き）

初めて書きます。

感想よろしくお願いいたします。

第一話

「私の所に来ない？」

この一言が原因で俺こと張紹は華琳の所に仕えることになった。

今でもその時の事は鮮明に思いだせるし、華琳に忠誠を誓って良かったとも思える。

だがしかし!!

だがしかし!!

「なんで武官の俺が文官の仕事をしなきゃいけないんだ〜!!
!!!!!!」

「仕方ないじゃない文官が足りないんだから
と我が主君こと、華琳またの名を『無い乳上司』が何か、ほざいて
いるが私、張紹は帰りたいです。

「ナイチチ？」

ヤバいなんか華琳から黒いオーラが出てます。

落ち着け、冷静になれ、クールになるんだ張紹、こうなった華琳は
通常の3倍の力を持っている、どうあがいても勝てない、ならば!
!!!!!!

あれを使うしかない!!!!!!

我が秘奥技三十六計

「逃げ…」

ガシッ

「ニガストオモウ？」

絶対零度の視線で俺に問いかける華琳。

あ！終わったな……。

「まあ、張紹の言う通り確かに分官の数は足りないわね」

とまあ華琳の言うように陳留の勅使となつたばかりの華琳には直属の部下と言えるのは、俺と夏侯惇（春蘭）と夏侯淵（秋蘭）しかない元々、陳留にいた文官やら武官は汚職やら賄賂やら忙しいのでほとんど使い物にならない。しかも、俺ら三人は武官なので書類仕事はたまつていくばかりなのだ。「華琳から見えて見えそうな奴いたのか？」

華琳はしかめ面で

「まあ何人かは、いたけど正直、私がやった方が早いわ」

「……いや、華琳を基準にしたら誰でも凡人になるよ、全くついていく此方の身になってみるよ」

またか、華琳は確かに何でも人並み以上にできるリアル完璧超人なんだよな、そのレベルを当たり前前に他人に求めるから配下の俺達は必死にならないといけないんだよな。

「私の下には一流の人材しか、いらないわ。だから、貴方や春蘭と秋蘭はそれだけの価値があると私は見ているんだけど？」

なんというか、ことういう事を本気で思っているから必死になってついでいきたいと思えちゃうんだよね。

「はいはい、わかっていますよ、この張紹、どこまでも曹猛徳についていきますよ」

「よろしい、じゃこれ追加ね」

そう言うともた俺の前に大量の書類が

「・・・前言撤回していいですか？」

すると華林が微笑を浮かべながら

「あら、男のくせにもう弱音？」

こいつ、完全に俺をおちよくってやがる。

「ちくしょうやればいいんだろ、やれば!？」

「あ!あとこれもよろしく。」

「ちくしょう……!……!……!……!……!……!……!……!」

第二話（前書き）

第二話です。よろしくお願いします。

第二話

目が覚めると目の前には……………

一目で業物といえる大剣を今にも振り降ろそうとしている長い黒髪を全て後ろに流した赤いチャイナドレスを着た美女がいた……………。

いやさ、朝からこれはないでしょ？

なんだよ、大剣を振り降ろそうとしているって!!

「あゝ、春蘭さん？いつも起こしに来てくれるのは有り難いんだけど、ちよつとその…………、もうちよつと普通に起こしてくれないかな？」

「？別に普通じゃないか」

と頭に？マークを浮かべながら首をかしげた。

「あゝ、確かに？いつも春蘭の殺気で起きてるよ、うん、間違いない」

「じゃあ、普通じゃないか？」

こいつ毎朝、同じ事言われているのにまた忘れたのか？

「いつも言ってるじゃん、普通に叩いたり、揺すったりして起こし

てって!!」

「そうだったか？」

「……何回目だよ、このやりとり。」

全く。いい加減、学習というのをして欲しいものだ何度言っても直ぐ忘れるんだから……。

「はあ、もういいよ。調練だろ？着替えるからちよつと待っててくれ」

「調練？ああ、そうだったな。わかった。先に出ているぞ。」

春蘭が出ていくのを確認してから、一人愚痴をこぼす。

「仕事を忘れていたのかよ……。」

残念な頭脳を持つ同僚に呆れながら、着替え初める。

全身を濃紺の着物で覆い、その上から、正直あまりセンスがいいとは言えない、華琳の配下の証であるドクロが所々にあしらってある防具をつける。

「やっぱり、変だよな？このドクロ。よし、次の軍議の時に軍の鎧のデザイン変更を提案しよう。そう言えば確か今度、洛陽に行く」と華琳が言ってたっけ？じゃあ、その時、阿蘇阿蘇のデザイナーに頼んでデザインして貰おうと一人決意を固めながら、手早く準備をすませ部屋を後にした。

調練と言っても、俺達には直属の兵がない。その為、兵の調練をしようにもできないので、自己鍛練の時間になっている。

調練場の真ん中で春蘭が先ほど俺を起こすのに使った大剣『七星飢狼』を華琳の愛剣？愛鎌のが正しいのか？

まあ愛用している鎌、だから愛鎌でいいのかな？……語呂が悪いな。

……何でもいいか。

とりあえず、その鎌『絶影』を使い打ち合っている。

「……………」

本当に凄いな、あの2人。春蘭はお世辞にも頭がいいとは言えないが、その代わり身体能力や武術に関して言えば化け物クラスだ。あの『七星餓狼』で巨岩を叩き割った時の事は忘れられない、本人は笑っていたが華琳や秋蘭や俺は啞然としていた。

それで、その春蘭を相手に引かずに相手をしているのは、『天才』、『人材マニア』、『リアルチート』、『胸以外完ぺく』

「死にたいの？」

「ごほん！ごほん！」

じゃなくて『完璧超人』などの様々な異名をもつ、我らが主君「曹猛徳」こと華琳。

「……華琳から『絶影』が飛んできたのは、きっと気のせいである……」

気のせいと言ったら、気のせいである。

「張紹、私達も初めるぞ」

と声をかけられ、現実逃避していた事に気づき、声がかけられた方を向くと青髪で右眼をかくしている青いチャイナドレスを着た、春蘭の妹、秋蘭がいた。

この秋蘭、俺の知り合いの中で唯一まともな人物なのである。秋蘭がいなければ俺はドS上司やおバカ同僚から受けるストレスで、今頃、廃人になっっているに違いない。

本当にいい人なんですよ……

それに同じ弓使いなので鍛練を一緒にしたり、お互い熱く弓について語り合うほど意気投合している。

まあそういう事情で今は秋蘭との鍛練の時間という訳である。

「んじゃ、やりますか」

秋蘭に声をかけ、2人で並び正面にある的に向かって弓を射る。

正直、俺と秋蘭では弓の腕は秋蘭のが上である。

今もお互いに矢を放っているのだが秋蘭の矢はことごとく的の中心を射ぬいていく。

「……」。いつも隣で凄まじい弓の腕を見せつけられているので、嫌でも自分との腕の差を理解してしまう。でも、そんな事、華

琳についていく事を決意した時に自分はどんなに足掻いても、何をしても、『天才』の域にはたどり着く事が出来ない事をなんとなく理解していた。

それでも、必死に努力して弓と剣術だけは、それなりの使い手になる事ができたが、春蘭や秋蘭の剣や弓の腕を見ると改めて自分には才が無い事を自覚してしまふ。

春蘭なんか、自分が苦勞して身に付けた技術を「見る張紹、昨日お前がやってたやつだぞ！」とか言っただけで使いこなしているんだぞ！！
そんな時はあまりの理不尽さに落ち込んで3日間引きこもってしまった。

そうやって、弓の練習をしながら自分の無能さを再確認させられている内に、どうやら各自、鍛練が終わったようだ。向こうで華琳と春蘭が城内に戻って行くのが見える、隣で秋蘭も後片付けを初めているので、俺もそろそろ切りあげるとしますか。

鍛練を終えて、しばらくすると会議のため、華琳の私室に向かう。

で、何故、会議室などの広々とした場所でやらないのかと云うと、まだ陳留に赴任してきたばかりの華琳には敵が多く、その敵がいる所でわざわざ会議をする訳にもいかないので、本当に重要な事は華琳が信用している部下を内密に集めて華琳の私室で会議を行っているのである。

華琳の私室に俺、春蘭、秋蘭、文官数名が全員集まり席についた。華琳はそれを確認すると今回の議題を切り出した。

「今回の議題だけど、人手不足についてよ」

やっぱりか、この会議に集まった人数を見ればわかると思うが、曹操軍には人手が足りない。その中でも今、最も必要としているのは優秀な文官と兵士で、今までは華琳と秋蘭の補助のおかげで、なんとか文官の不足をごまかしてきたがそろそろ限界が近い。

兵士については、この陳留に元々いる兵士は華琳と敵対している集団の頭である李通の物であり、それに対抗する為、至急集めなければならぬという事情だ。

ふむ、見た所どうやら春蘭以外の全員がそれらの事情を理解しているようだ。

一応分かりやすくまとめておいた方がいいよな？

「あゝ現状、我々に不足しているのは文官と兵士であるのは皆、理解していると思う。それらは解決する案があれば各自、献策するよーに！」

と俺が言うと、出るわ出るわ、様々な案がそこから華琳がどのような案を採用するか決めて各自に仕事を割り振っていく。

「春蘭は兵の調練を。秋蘭は今出た案を使って兵を集めなさい！他の者は各地の名士に優秀な人物の紹介をしてもらいなさい！張紹はこの後少し話があるから待つように！」

「御意」

「では、解散」

華琳の言葉を聞いて俺以外の全員が華琳の部屋を出ていく。全員が出て行ったのを確認すると俺はさっさと話を聞きたいので華琳に声をかけた

「で、俺は何をすればいいんだ？」

華琳が俺だけを残したという事は春蘭や秋蘭には任せることができない、汚い裏の仕事があると云う事だ。華琳は正々堂々の戦いを好み、これから出す指示のような裏での汚い仕事は毛嫌いしている。まあ華琳もそのような裏の仕事が重要だという事も理解しているのだから俺に指示を出すのだが。

「はあ。本当はこんな指示出たくないのだけれど」

「まあ華琳、気にするな。どうせ、実行するのは俺だし、こういう時のための言葉『私の独断でやりました』があるじゃないか」

華琳は何か勘にさわったようで顔を歪めていた。

「・・・っ!!。あなたはいつもそうやって・・・!!。・・・いわ。張紹、李通と取り引きしている奴隷商人と盗賊の頭を抹殺しなさい。そして、李通と繋がっているという証拠を持ってきなさい」

「御意」

何が華琳の顔を歪めたのかわからなかったが、とりあえず華琳から指示が出たので仕事でもしますか。華琳から仕事の指示を受け、早速どこからあたるか考えながら部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1109y/>

忠臣と呼ばれたい

2011年11月3日02時20分発行